

紹介

池田史郎編

皿山代官旧記覚書

皿山代官というのは佐賀藩が領内陶業地有田皿山に置いてその保護と統制とに当らしめた役人のことであるが、この代官が寛延三年から天保二年に至る八十五年間、本藩諸役所と管下の釜焼・陶商・絵書・細工人等との間に立つてとりかわした文書類を、処務の便宜のために分類筆写しておいたのが、ここにいう「旧記覚書」である。原本は今、藩主鍋島家から佐賀県立図書館に寄託されていて、専門容の間で珍重されているものであるが、この度、多年その解説を調査に専心されてきた佐賀県史執筆委員池田史郎氏の手によってその全冊が編集公開された。

有田は伊万里とともにわが国近世窯業発祥の地であり、染付色絵において特色ある優品を数多く産出することによって、地方産業として著しい発達を示し、技術的にも経済的にも就かすべからざる地歩を占めて

いるにかかわらず、その発達の歴史は史料の関係もあって今日まで十分明らかならぬところが多かった。この「覚書」はたまたま寛文から元禄に至るその最隆盛期を過ぎて後の時代に属するものながら、近世中期以後における有田焼に対する藩の諸政策をはじめ、窯業の組織、窯焼・絵付職人と陶商との関係・販売組織とその方法など、各種のことに亘ってその実態を巨細に知る上に得がたい材料を数多く含んでおり、最近における窯跡の発掘調査と並んでこの方面の研究に貢献するところ少なくないであろう。

それにしても原本は跡方、一順、打追、妥切、埴(すくみ)等々特殊な方言・用語を数多く含み、多年その地においてそれらの用例に熟達した編者のごとき研究者なくしては容易に解説し難いものであることを思い、その労苦に感謝と敬意を表する。

(A5判 本文五二二ページ 口絵七枚 昭和四一年七月 佐賀市白山町 金華堂 発行 定価二、五〇〇円) (柴田 実)

野田只夫編

丹波国黒田村史料

丹波国山国荘は、京都の西北方面、大堰川の清流に沿って細長くのびた山間の荘園で、現在でも屋根に千木をのせた家々のたずまいなど、さながら中世を今に伝えている別世界をなしている。ここに伝えられている中世の文書を中心に野田氏が『丹波国山国荘史料』を公刊せられたのは、昭和三十三年であったが、このほど、その続篇として、本書を上梓せられた。黒田村とは、旧山国荘の東半部、山国村の技郷にあたり、黒田・宮・下黒田・灰屋・片波・芹生(以上現京都府北桑田郡京北町)および広河原(現京都市左京区)の七か村よりなっている。収載文書は二六家全七一六通、うち九四通は天正以前の中世文書である。(但し、前著『山国荘史料』との重複ははぶき、また旧山国村のうち前著いごに見せられた中世文書が合せて収載されている。)近世文書は、近世初頭を中心に、幕末・明治にいたる主要資料——免状・皆済目録・検地帳・宗門帳なども含めて網羅し、